## 病院の理念，雑誌の理念

NHO 東京病院　四　元　秀　毅

かつて「イデオロギーの終焉」が唱えられた時代があったが，ギリシャ以来の「イデア」や「ロゴス」が急に廃れるはずもなく，組織の栄枯盛衰の激化につれて「理念」の重要性が強調されるようになった．国立病院・療養所にとって昨年は独立行政法人への鞍替えの年であったが，これと軌を一にして雑誌「医療」についてもその存続の議論がなされた．そこで，この機会に病院や雑誌の理念について考えてみたい．

### 大学病院の使命－研究・教育・診療－

以前，大学の医局で大学病院の使命は「研究・教育・診療」であるということをよく聞いたものである．これは大学附属病院の設立趣旨を示す標語としてわかり易いが，昨今の「病院の理念」をみると，この三項目が含まれていることが多いのに気付く．すなわち「すぐれた診療」，「情報の発信」，「医学教育」である．最近ではこれに「健全な経営」が加わることが多いが，法人化で大学病院も旧国立医療施設も経営重視の点で同じ基盤にたつことになり，この点でも共通性が高くなった．病院ではこのなかで診療に関するものが中心になり敷衍されるのは当然であるが，よくあげられる理念の内容をみると気になる点がなくもない．

### 「理念」と病院の存在理由

大学病院のスローガンは全国共通の金太郎飴であったが，設立の趣旨を示しているという点でわかり易かった．これに対して病院の基本理念として一般にあげられるものは，設立趣旨より医療の姿勢を強調するものが多いようである．たとえば「患者本位の診療」ということがしばしば最初に強調されるが，これはヒポクラテス以来の「医の倫理」で，いままで軽視されてきたことの反省からかも知れないが，あまりに初歩的という気がする．病院の理念としては，本来，設立趣旨や病院の存在理由，すなわち，「なぜ当病院が必要で，他の病院とどこが違い，どのような特色を目指しているか」を冒頭に示すべきではないだろうか．この点で災害医療センターや日本赤十字社の病院などのように救急医療や災害医療を目的とする病院の場合には特色が明確でわかり易い．国立病院・療養所も，第二次大戦前は国策に沿った組織であったので任務が明確であったし，敗戦後も当初は国内の病院・病室の不足を補うものとしての意義があり存在価値が高かった．しかし社会資本の充実などで公立・私立の医療施設が増えるにつれて国立医療施設の必要性が低下し，今回の法人化で設立趣旨という面での特色は甚だしく薄まった．全国のさまざまな場所に国設立による病院があって常時・非常時に住民の生活の支えになるというのは国民側からは頼もしいことであろうが，経営効率一点張りの世の中で僻地に病院を持ちこれを維持するのは不可能である．地震・災害などの際に一定の評価は受けるとしても，これらの努力が社会的に認知され，これに対して予算措置がとられるのは難しいのが現状であろう．

### 「理念」は実現可能なものか

「患者の立場にたつ医療」ということがいわれたりするが，医療を行う側は健康でこれを受ける側は苛酷な運命に縛られる病者であってみれば，前者が後者と同じ立場にたつのは事実上不可能である．患者に接するときの気持ちの持ち方としては「親身の医療」などが妥当という気がするが，肉親を診療するのは難しいのでこれが適切かどうかもわからない．医者は患者に対して冷静な立場にたって診断・治療を行うように訓練を受けるが，気持ちの通いあう医療はいわばその対極にあり，これらを両立させるのは実は容易でない．また，「地域医療」もよくいわれることであるが，救急医療を含む地域医療を全うするには相当のスタッフと機器の整備が必要で，そのためには先立つものがなければならない．

### 「理念」の間に矛盾がないか

「患者本位の医療」を唱える一方で「健全な経営」を強調するが，この両立は簡単ではない．たとえば前者の立場からは有料個室は好ましくないし，後者の立場からは全病床を有料化したいということになる．きれい事ですなない点が少なくないのである．

### 「雑誌の理念」

さて，雑誌「医療」については編集委員会その他でいろいろと検討されてきた．これまでの問題点の一つは本誌と母体の学会との関係であるが，まず学会の存在理由が示され，その機関誌としての任務と内容が明確になり，発行のための体勢作りと財政的裏付けが確立される必要がある．これらの点について国立病院機構と厚生労働省の両者から見解が示され，内容が明確になりつつあるのは大変に喜ばしい．

これらを考えてくると，結局，「理念」と「財政」は表裏一体の関係にあることが痛感される．